

# 5 『国書がむすぶ外交』評への リプライ

松方 冬子

厳しいご批判と、過分なお褒めのお言葉を本当にありがとうございました。  
それでは、私から簡単にリプライをさせていただきたいと思います。

## 歴史は勝者によって書かれる

中国型A→B→C vs 地中海型C→C→C

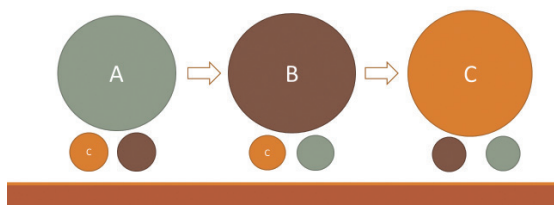


図1

岡田英弘氏<sup>24</sup>の著作に『世界史の誕生』(筑摩書房、1992年)という本があります。同書によると世界史の書き方は二つしかありません。一つは中国型で、もう一つは地中海型です(図1を参照)。

私の理解に従って簡単に説明すると、時代につれて「強い人」がA→B→Cと移り変わって、勝者であるCの人が歴史を書きます。「人」でなくて、「国」でもかまいません。ここまでは、どちらでも共通です。ところが、中国型では、A→B→Cという歴史を書くのに対して、地中海型ではC→C→Cという歴史を書きます。つまり、「歴史」とは何か、すなわち「自分の過去」とは何か、に対する考え方が違うわけです。

24 岡田英弘(1931年～2017年)は、日本の東洋史学者。東京外国語大学、東洋文庫などに勤務。専攻は満洲史、モンゴル史であるが、中国・日本史論についての研究・著作もある。フリー百科事典『ウィキペディア』より引用。

それで、ここからは私が付け加えたい点なのですが、中国型は自分Cの後にDが出てきても、自分Cは「Dの偉大なる前任者」になるので何も問題はない。しかし、地中海型では、CからするとAとBは「悪の帝国」であり、「僕たちCは小さくて弱かったけれども、知恵と勇気と愛と友情で『強い人』になった」という結論になる。ですから、できれば次の「強い人」Dは出てきてほしくない。次の「強い人」が出てくると、自分Cも「悪の帝国」になってしまいますから（笑）。Cが素晴らしい歴史を書けば書くほど、「歴史」はCをもって終わらざるをえない。19世紀に「僕」=ヨーロッパ（C）があまりにもよくできた歴史を書いたので、歴史学はその後どうしてよいかわからなくなっています。歴史といえばCがゴールのように思われているので、20世紀、21世紀は歴史が書けなくなり、大変なことになっていると思います。いわゆる「帝国論」<sup>25</sup>というのは、AやBも自分たちの前任者として認める、中国型を歴史記述に取り入れようという試みである。それが私の理解です。

### 『国書がむすぶ外交』は女性史観？

『国書がむすぶ外交』は E→E→E？

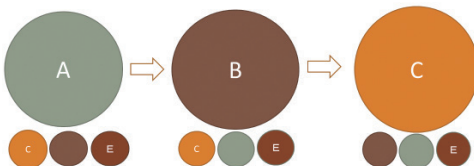


図2

その考え方によると、『国書がむすぶ外交』の書き方は中国型と地中海型のどちらにあたるのだろうかと考えてみましたが、どうもどちらでもない。あえて言えばE→E→Eかもしれません。

25 山下範久氏の説明によれば、近代がゴールではないという前提で、近代によって克服の対象とされた「帝国」なるものの様々な要素が再度組み合わせられて、世界のかたちを変えるかもしれないというような世界史記述の傾向。たとえば、フドミニク・リーベン（松井秀和訳）『帝国の興亡』上・下（日本経済新聞社、2002年）、ニール・ファーガソン（櫻井祐子訳）『劣化国家』（東洋経済新報社、2013年）、山下範久『世界システム論で読む日本』（講談社、2003年）、フランス・フクヤマ（会田弘継訳）『政治の起源』上・下（講談社、2013年）などを参照。なお、近代が「帝国」を克服の対象としたことについては、岡本隆司『君主号の世界史』159-163, 234-235, 239頁がわかりやすく説明している。

なぜこの話をするかという、岡本先生の『世界史序説』を批判された桃木先生に、何をよくないと思われたのか直接伺ったところ、「男性史観だから」というご批判でした。つまり、「強い人」の歴史だからダメだとおっしゃっているのだな、と私はごく単純に理解しました。たしかに、『世界史序説』を最初に拝読したとき、素朴な感想としてすごく面白いと思い、西洋中心主義の批判としては有効だと思ったのですが、私はこういうふうには書かない、あるいは書けないと思いました。

なぜなのだろうと考え、自分は「一番偉い人」や「強い人」などにはあまり興味がないからではないかと思に至りました。私が女性だからかどうかは分かりません。自分を知らないだけかもしれません。かといって、「偉くない人」とか「強くない人」の歴史を書きたいわけでもない。「自分が世界をこうマネージしたい」という積極性はなく、「こうも見えますよ」と茶々を入れている感じと言ったらいいでしょうか。そのあたりがおそらく、山下さんのおっしゃる史観批判①だと思います。何となく言いたいことといえば、「自分の頭で考え、自分の足で歩むふつうの人々の経験蓄積を提示したい」といったことかと思います。

## 「ほっとけ平和主義」の日本と、戦争がすぐそこにある国々

先ほどご指摘があったように、和文脈の世界史を語るとき（『国書がむすぶ外交』総論の副題<sup>26</sup>がちょっと長いのですが「和文脈」という言葉を使いました）、「またがって活動する」とか、「偉い人びと」というかたちで和語をあえて出しているところがあります。

それとは別に、もうちょっと「和文脈」を深読みして、「自分自身の歴史観・世界観はこうだ」みたいに言うならば、ちょっと「ほっとけ平和主義」的なところがある。「ほっとけ平和主義」は書評か新聞で聞きかじった言葉でちゃんと勉強したわけではないのですが、あえて言えば、keeping distance

26 「一五——九世紀南・東シナ海域の現場から和文脈の世界史をさぐる」。

for peace といふか、「外の世界と距離を置いておけば平和に暮らせるだろう」といった感覚です<sup>27</sup>。日本の歴史教科書では、前近代の外交史って、ほとんど「国書」の歴史として書かれていると思います（「国書」というという言葉さえも、もとはたぶん、朝鮮から学んだんですけど）。「国書」を鍵にしていることに、教科書執筆者は無意識だと思いますが、実際に教科書には国書が大事な場面で何度も登場します。

そこで、「国書」についてよく考えてみようということで、実は国書の世界的な比較研究をやってみようと思いつき、先月の末にタイと韓国から研究者をお招きして、この東京大学ヒューマニティーズセンターでワークショップをさせていただきました<sup>28</sup>。そのとき、あるいはその準備の過程でタイや韓国の研究者たちと交流すると、彼らが、私の話は日本に関わる事例が多く取り上げられているためにすごく Japan-biased だと言うのです。

どこがどう Japan-biased かというと、日本を中心とした「国書」で出てくる話題が、交易に偏っているということです。日本の地理的条件から、歴史的な事例として戦争がほとんど出てこない、と。交易中心で、戦争の危険が全然感じられない、戦争を避けるためにしていること、という感じがしない。私が日蘭関係史を専門としていてオランダ東インド会社の外交史の話に明る

---

27 補足説明（松方）：日本の日本史教科書に見られる世界観は、「世界とつながっているという感覚は必要であるものの、つながり方は「国書」手紙で十分であり、それ以上に強いつながり（たとえば『自分で世界を支配したい』など）は必ずしも志向していない」ように見分けられる。それは、私が学んだ日本史教科書に通底する世界観ではないかと思われると同時に、私自身の世界観でもあるような気がする。実際に、列島の前近代の歴史がそのような過程をたどったから（外部に積極的に働きかけようとした形跡が、古代、豊田政権期を除いてほとんどなく、逆に働きかけを受けた経験もあまりないから）、そのような歴史が書かれている、ともとれるし、逆に「ほっとけ平和主義」を持っているから、歴史教科書においても「国書」が目立っている、とも解釈できるだろう。私は、これが悪いことだとは思っておらず、「交渉や戦争によってどうにかしよう」という世界観、歴史観、外交観（これだけで押すと、どこかで行き詰りかねない）にある一定の対案を提示することにつながっていると思う。一方で、この感覚を大陸の人々（後段で述べるように、たとえばタイや韓国の人々）に共有してもらえるかという、歴史的経験から言ってもかなり難しいのではないだろうか。日本人が国書に注目するのは、「対外的な外交関係が、ほぼ国書しかなかったから」であり、その着眼点が世界中の皆さんのお役に立つことが事実だとしても（実際、2019年11月のワークショップではそのような感覚を持ったが）、そのことは「ほっとけ平和主義」の世界的共有が可能であることを意味するわけではない。

28 2019年11月29日（金）に開催された東京大学ヒューマニティーズセンター・オープンセミナー特別回「王の手紙、皇帝の文書：一外交の世界史に向けた韓国、タイ、日本の鼎峙の試み」（於：東京大学伊藤国際学術研究センター）。タイや韓国からの招聘報告者は、パーワン・ルアンシン（チュラーロンコーン大学准教授）、ティエラワット・ナ・ボンベット（チュラーロンコーン大学名誉教授）、鄭東勲（ソウル教育大学助教）、丘凡真（ソウル大学教授）であった。<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/personal/fuyuko/kaken/humanities.html> (accessed 22 April 2020)。同セミナーに関して、ヒューマニティーズセンター・ニューズレター第2号でも紹介されている。[https://hmc.u-tokyo.ac.jp/ja/newsletter/uploads/newsletter02s\\_0319-2.pdf](https://hmc.u-tokyo.ac.jp/ja/newsletter/uploads/newsletter02s_0319-2.pdf) (accessed 22 April 2020)。

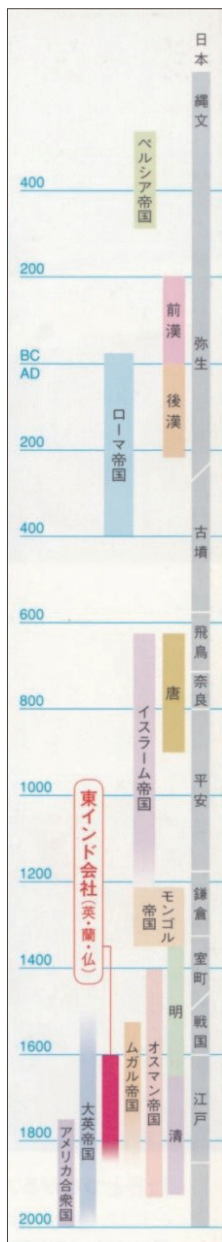


図3

出典：羽田正『興亡の世界史15 東インド会社とアジアの海』口絵

いせいもあって、いよいよ交易中心になったきらいもあつたと思います。が、日本の事例から垣間見られる歴史的経験の蓄積、あるいは世界観は、戦後日本がそうであるように、「ほっとけ平和主義」的なのです。一方、タイや韓国の事例を聞くと、すぐ裏に戦争がある（それを戦争と呼ぶのか、バイオレンスと呼ぶのかは別として<sup>29)</sup>）ことが強く感じられます。

今、日本の歴史は一本線の「チューブ」のようなものであると思われています。「日本」という一本線の「チューブ」が縄文時代から現代まで続いてきて、それが古代、中世、近世、近代（あるいは、平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代）というように区分されている。時代ごとに冊を分けられつつも同じ装丁で統一された『岩波講座日本歴史』『学習漫画日本の歴史』などが、そのチューブの存在をリアリティあふれるものにしていきます<sup>30)</sup>。けれども、実際には「日本」の版図（領域）は、時代によってすごく伸び縮みし、「日本」の中央政府が東北地方をまったく支配できていない時代もあれば、朝鮮半島が「日本」の一部だとされ

29 日本語では「戦争」でよいかもしれないが、英語で war という、宣戦布告と講和条約に挟まれたもの、という語感があるため、前近代のアジアで行われた「戦争」は violence と呼ばれる傾向にあるので、このような一言が加わっている。

30 補足説明（松方）：かつて、羽田正『興亡の世界史15 東インド会社とアジアの海』（講談社、2007年）の書評を口頭でしたことがあるのだが、そのとき最も印象に残ったのは、皮肉にも同書口絵に掲載された図であった（図3を参照）。なお、「ローマ帝国」「モンゴル帝国」など、左側に色付けされて並ぶのは、同シリーズで取り上げられた諸勢力。著者に確認したところ、この図は著者の知らないところで出版社が挿入したものだとのことである。『興亡の世界史』シリーズ（2006年～2010年）に各冊に類似の図がついている。この図は、おそらく出版社の意図としては、単に、日本人の一般読者にとってのわかりやすさを追求して、各巻がどの時代を表すかを示しているだけの図なのだろう。しかし図らずも、「世界のどの（偉大なる）帝国よりも長く続く、安定したチューブとしての日本」史像を表しているようにも見える。そもそも「興亡の世界史」というタイトル自体が、深読みすれば「興亡しない（万世一系の）日本史」の裏返しだとも解釈できる。

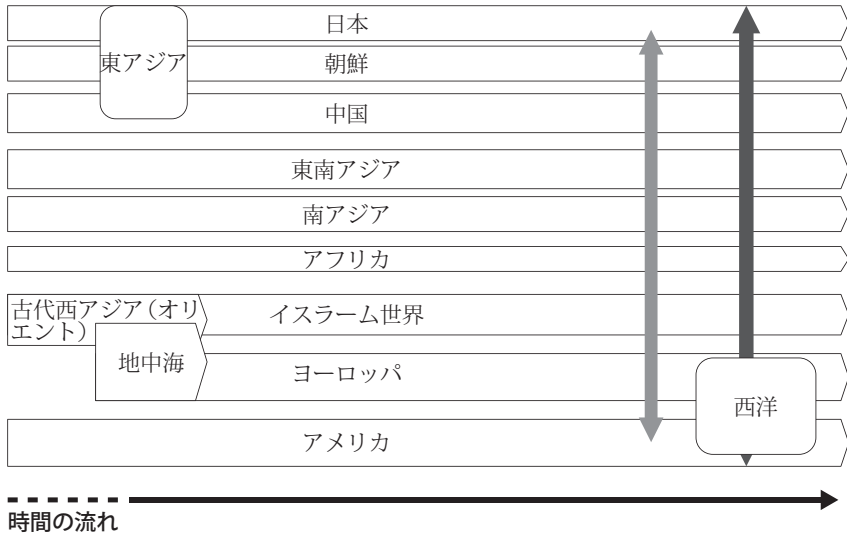


図4 現代日本における一般的な世界史理解  
 出典：羽田正『グローバル化と世界史』、133頁

た時代もあります<sup>31</sup>。そして、実は、それほど昔から日本史は一本のチューブだと思われていたのではなく、数十年前からそのイメージが非常に強固なものになったと思います。でも自分の国の歴史がチューブだと思っているから、他人の国の歴史もチューブだと思っていて、チューブとチューブをつなぐものとして「国書」があるという漠然とした理解が共有されているのかなという気もしています。複数のチューブの束としての世界史を羽田正さんなどが悲観しているのと意外と対応しているのかなと思っています（図4を参照）<sup>32</sup>。

それはちょっと踏み込み過ぎかもしれないけれど、先ほど山下さんや岡本さんもおっしゃった自分自身の史観を自覚するというのが、11月の国際ワークショップの一つの目的であったと言えるかもしれません。

31 補足説明(松方):伸び縮みさせた力は、たいていは戦争であり、ときに外交交渉であった。もちろん、日本史教科書にしても、戦争に言及しているのだが、基本的な歴史理解が「チューブ」であることには変わりがない。  
 32 羽田正『グローバル化と世界史(シリーズ・グローバルヒストリー①)』(東京大学出版会、2018年)、133頁;羽田正『新しい世界史へー地球市民のための構想』(岩波書店、2011年)、19頁にもほぼ同じ図が掲載されている。

## 「最小限の合意」「エージェントと構造」「普遍性」について

### ——廣野氏へのリプライ

では、廣野さんからのご質問やご指摘への回答に移ります。英国学派の考えからすると、「最小限の合意」とは「命を守る、約束を守る、所有の安定」ではないですか、とのご質問がありました。しかし、私が言っている最小限の合意とはもっと皮相な話で、価値やゴールといったところにまで踏み込めていない。「手紙がきつと向こうから来るだろう」というレベルの「やり方の合意」なんです。それによって、ある種の価値観の問題から自由になろうとしているところもあって、結局何も言っていないじゃないかと言われれば、おっしゃるとおりです。

「エージェント」に関してはご指摘のとおりで、「構造」とは何を指すのかについてはもしかすると何も応えられていないかもしれません。

「普遍性」についてもご指摘をいただきました。「絵」による国書もあるのでは、とのお話でしたが、おっしゃるとおり、そこは本当に実証史家の弱いところなのです。実証史家は文献史家でもあるという制約があり、文字が残っていないところは非常に苦手です（力が及ばないだけのことで、排除しようというつもりは毛頭ないのですが）。国書で言うと、国書に代わるような特定の事例も視野に入れたいと思っています。たとえば、マレー世界において、金花・銀花と呼ばれる象徴的な品—金と銀でできた小さい木や花のようなもの—<sup>33</sup>を交換することによって、服属を表すといったようなことです。

### トポロジーによる構造の解体

私は高校生のときにトポロジー（位相幾何学）にちょっと憧れていました。ユークリッド幾何学では○△◇の三つの図形は全く違う図形と捉えますが、トポロジーではこの三つを同じ図形と判断します<sup>34</sup>。「一つの線で空間を囲ん

33 [https://en.wikipedia.org/wiki/Bunga\\_mas](https://en.wikipedia.org/wiki/Bunga_mas) 参照のこと。

34 トポロジー (topology) とは、「柔らかい幾何学」とも呼ばれ、図形をぐにゃぐにゃに変形しても「不変に保たれる性質 (位相不変量)」を追求する幾何学の一分野である。○と△と◇は、穴が無いという「不変に保存される性質」を有するゆえに、本質的に同じ図形だと捉えるというのがトポロジーの考え方である。一方、○と◎は、穴の有無によって「不変に保存される性質」を持たず、本質的に異なる図形であると解する。

でいる紐みたいなもの」という点ではみんな同じだと考える。つまり、定義を緩くするわけです。それによって⚡や☾も幾何学の対象として普通に見えるようになるというもので、その自由さがいいなと思ったのです。

これになぞらえる形で私が考えたのは、時系列史を相対化するとは、史料（文字）を持たない人、たとえばタイ史だと16～17世紀の史料はあまり残っていないと聞いていますが、そのような史料があまりないところも、イタリアのように史料が多く残っているところと同列に扱えるようにしよう、ということなのです。副産物として、時系列からも自由になると思います。「人間の経験の蓄積として、次にどう行動するかを選択肢のストック」のような感じで、歴史を描けないかなということでした。

最終目的としては、「日本の歴史」や「アメリカの歴史」ではなく、「作る人の歴史」とか、「商う人の歴史」とか、「癒やす人の歴史」というようなものを目指してもいいのかもしれませんが。

## 人文科学と社会科学はどうしたら協働できるか

また、社会科学との対話ということを考えると、先ほど山下さんがおっしゃったことと同じだと思うのですが、「こういう風に未来をつくろう」というテーゼがないと、社会科学的には対案にならないかもしれない。一生懸命に対話をしたつもりでも、①の批判にしかならない。人文科学はテキストを読むことによって、実証することによって、自分が柔らかくなっていく過程を楽しむもので、「価値観の軸を複数示す」という点においては②に近い部分もあります。「本当にそうですか？」と凝り固まった頭をほぐす。

私の乏しい語彙力で抽象概念は扱えないので、あえて筋肉でいえば、社会科学が「鍛える」のに対して、人文学は「ほぐす」かなと。

以上を私のリプライとさせていただきます。